

Glocal Tenri



3

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.20 No.3 March 2019

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
「平成」を振り返る
／高見宇造 1
- ・ 「元初まりの話」に登場する動物たち (38)
動物たちの“同定”の経緯 ②
／佐藤孝則 2
- ・ 日系移民の歴史にみる天理教の北米伝道の様相 (27)
太平洋戦争と北米伝道 ⑤ アメリカ本土の教信者たちの強制立退と収容所生活
／尾上貴行 3
- ・ 日本語教育と海外伝道 (8)
国内での日本語教育と海外での日本語教育 ③
／大内泰夫 4
- ・ キルケゴールで読み解く 21 世紀 (6)
「お試し」セットの信仰か、飛躍による単独者の信仰か—信仰の逆説を問う—
／金子 昭 5
- ・ 遺跡からのメッセージ (43)
文化遺産を今に活かす ⑩ 明日香村の日本遺産と遺跡整備
／桑原久男 6
- ・ コンゴ社会から見るアフリカ・ヨーロッパ関係試論 (24)
ベルギー領コンゴの独立 ①
／森 洋明 7
- ・ 現代宗教と女性 (23)
ケアの視点から問う「生産性」
／金子珠理 8
- ・ 思案・試案・私案
失われる命・・・“旧優生保護法” ⑤
／八木三郎 9
- ・ English Summary 10
- ・ おやさと研究所ニュース 11
第 65 回コルモス研究会議に参加 (金子昭)
／宗教研究会を開催／『グローカル天理』
合本のご案内／平成 31 年度「公開教学講座」
のご案内／『グローカル天理』年間購読のご案内／「出前教学講座」申し込み受付／新刊案内

巻頭言

「平成」を振り返る

おやさと研究所長 高見宇造 Uzo Takami

安倍晋三首相は 1 月 28 日、第 198 通常国会施政方針演説の冒頭、「平成」を阪神淡路大震災 (平成 7 年) や東日本大震災 (平成 23 年) を踏まえ、大きな自然災害が相次いだ時代と振り返った。30 年前、小淵恵三内閣官房長官は新元号発表の際、「国の内外、天地とも平和が達成される」と「平成」に込められた思いを述べたが、現実には政財界において、また特にオウム真理教事件など我が国の根幹を揺り動かすような出来事がいくつもあった。しかし国民すべての力で乗り越えようと努めた意味で「震災」は記憶に残されるべきものだと思う。その意味で「平成」を振り返り、何が次代に伝えられるのか、考える手立ては色々にあるが、私は各地の被災地で新成人を迎えた若者の声にそれを探してみた。

宮城の『河北新報』(1 月 13 日号) は社説で「未来の扉はその手で開こう」を掲載。東北 6 県の新成人、約 8 万 9,700 人が小学校を卒業した平成 23 年 3 月に東日本大震災に被災したことに触れ、卒業式も満足にできずに卒業したこと、そして大勢の児童がその後、震災孤児として深い心の傷を背負って成人式を迎えたと報じた。

『福島民報』(1 月 14 日号) は菅野龍さん (淑徳大学 2 年) を取り上げている。彼は飯館村の新成人式の席で、仮設校舎の中学校生活を支えてくれた恩師を目標に教員の道を志すと決意を述べた。両親と 3 人で福島市内の借り上げ住宅に暮らしたが、恩師から優しく接してもらい、慣れない生活の不安が消えたと言う。授業時間、恩師は笑顔を絶やさず、おかげで心が和んだという。教師への憧れを胸に将来は母校の教壇に立ち避難生活の経験や復興の歩みを伝えたいと語る。

『毎日新聞』(1 月 15 日号) は、「亡き 16 人共に歩む」として仙台大野球部 2 年の鈴木大雅さんを紹介している。東日本大震災で児童 74 人が犠牲となった宮城県石巻市立大

川小学校に在籍した 6 年生 21 人のうち無事だったのは僅か 5 人。鈴木さんはそのうちの 1 人。見守ってくれるみんなに胸張れる大人になりたいと、これからも 21 人で一緒に歩み続けることを誓った。リトルリーグでエースとして活躍、高校は茨城県の強豪校に進学。その後は「近くでプレーしている姿を見せられたら」と仙台大学野球部に進んだ。「みんなが心の中にいる。だから恥ずかしくないように生きたい」と思いを語っている。

他にも『読売新聞』(1 月 15 日号) は、「古里復興の力に」として西日本豪雨被災地新成人の古里再生への思いを伝えている。西本千夏さん (広島修道大学 2 年) は「大勢のボランティアが来てくれて、復旧が早まった。私も地域に貢献できる人間になりたい」と話した。津村光希さん (広島大学 1 年) と枝川慧子さん (同志社大学 2 年) は、いざいざ「豪雨で当たり前の日常の尊さを強く感じた。一日一日の暮らしや、人のつながりを大切にしていきたい」と誓いの言葉を述べたという。こうした新成人の思いを聞かせて頂くと、私は各地の被災地から早晩、この国の将来を担って立つ有為の人財、人の心の痛みに寄り添い、その心をつなぎ、地に足を据えて人を育てる人物が生まれてくることを確信する。

東日本大震災復興構想会議議長を務めた五百旗頭真氏 (兵庫県立大学理事長) は、『文藝春秋』(2019 年 1 月号) の「平成 30 年史全証言」で、「被災の経験を次に活かす形で、地域社会同士が連携を深め、国民共同体として助け合っています。……つまり、平成日本は、度重なる災害に耐え忍んだだけでなく、危機を乗り越えることで、社会的にも精神的にも、一つの“成熟”を遂げたのではないのでしょうか。」と述べている。「平成」はそのように振り返られ、語り継がれることを願う。私たちが信仰の言葉、「ふしから芽が出る」を心に新たな時代を迎えたい。